

京鹿子

京都府立総合資料館
2023年11月号

11月号

豊田都峰

灌響集 その五十一

口ぐせに残暑まみれの書齋なる
二三頁うばひてゆきし野分かな
絵すがたは鬼灯市の幼き日
灯ともれる鬼灯さげて家路なる
白鳥座いのりのかたに組みにけり
首のべて五星かがやく白鳥座



夜も更けて十字の星は白鳥座
鳥渡りきて山川のととのへり
鳥渡りきては野山の点晴なる
遠き嶺呼びてすすきは穂になりゆく
穂すすきと小半日なる雲あそび
青々とすすきの午後の話好き
夕映のすすきにふれて遠くなる
夕ぐれてすすきの欲しい遠きの灯

—丸山佳子作品—

草の花

丸山佳子



しづけさもこの白萩も蝶のもの
蓑虫の貌出すそこにだれもゐず
蝗かなし細き草もて貌かくす
秋草をしごけば指に匂ひ立つ
野路暮れてわが足刺すは草の花

秀華採集

矢車草星の歳月廻しけり

安田優歌

「矢車草」の花の形からの連想が星、そして「星の歳月」としたところが楽しい。一本の花から思いが果てしなくひろがる。

病窓の数は待つ数星月夜

片山熙子

ポップコーンぼろぼろこぼれ原爆忌

岩佐英子

前句。退院を「待つ数」として、それを「星月夜」のしたに置いたことで、多くの待つ思いへの思い入れが果たせている点を評価した。後句。廃止とか禁止とか表面的にはいろいろ言われているが、実質は句意の通り。たいへん具体的を評価する。



—近詠—

鈴鹿
仁

赤べこ

ほほづきや赤べこ意地の首を振る

山鳩のひとしきり啼く神無月

掛稲や益荒男ぶりの怒り肩

萩まつり二句

萩白し明日の吉は風とくる

萩月夜愛でる言の葉生れけり



— 近 詠 —

和田 照海

ひろしま忌

ひろしま忌かの世へつなぐ糸電話
雲わきてひろしまの忌と思ひけり
青とかげ跳ねてドームの罅ふやす
ひろしまの魂呼び戻す茄子の馬
八月は昭和のにほふ忌日かな

神麓集



六万四千円支払 北村香朗
鬼灯に入る何から何かまで
桐の紋はつきりとときまりごむ
幸い鉢ゆつくり運ぶ快き
星飛んで秋の気持を得たりけり

単衣出すどの抽出しも過去ばかり
夏の野をとどのつまりへ行く電車
置物のやうに坐りて避暑の父
じりじりといのちの氷柱瘦せ細る
涼しさや京には多き女坂

梶の鞠 藤岡紫水
残暑なおダンプが落す砂の雨
消え去りし流灯追ひて匂ふ闇
梶の鞠紗の水干のひるがへり
桐一葉地に着くまでのしじまかな
もの影の四方の隅より秋生まる

すがれ蟬 北川孝子
ひとことの反芻増やすすがれ蟬
身の丈の暮し守りて冷麦茶
月齢のまたひとり逝き名残蟬
暑と勝負以外省略の暮しぶり
カンナの炎皿の大辛カレーかな

小春日 竹貫示虹
訃報来る時雨の齡と思ひけり
小春日や別れはいくつあるのやら
老ひとり雪のしらせの身に迫る
小六月時間長者のひとりもの
生きるのが楽しくなりし小春の句

芒 柴田朱美
すすき野や心に闇を曳きずつて
命日の仏花に芒の一本を
芒一本手折りて帰路を急ぎけり
小さな駅降りて芒に突き当る
芒数本遊ばせてをりひとりの夕

神麓集



銀河丸井巴水
三猿の四つ物言ふ目の肥りすぎ
冷淡に去るくちなはの掠鳥の群れ
敗走の空に道あり椋鳥の群れ
絹漉しの白さ処暑なる奥座敷
琴反りの銀河の果てへ深追ひす

水曜日 塩貝朱千

チエツクシャツ粹に着こなし里案山子
赤とんぼ群ゐる中に乳母車
夕空や薄の束に野のかをり
まつすぐにすすきを活ける水曜日
風入れて窓辺の尾花よろこばす





京鹿子集

豊田都峰選

矢車草星の歳月廻しけり

訃の知らせ天響となる夏の星

炎天に石切る音や沈・沈黙

子の唄に伴奏つけし法師蟬

病窓の数は待つ数星月夜

晩夏光海が見たいと想ふ日々

歩かねば俳句は詠めぬ蓼の花

幸せのすみに淋しさ糸とんぼ

ポップコーンぼろぼろこぼれ原爆忌

フライパン蟬もジージー灼けてゐる

高 槻 安田 乙優歌

京 都 片山 熙子

岩佐 英子

バス停に一本の木の木の日蔭かな

採れたての茄子キユツキユツと発信す

三十年会はぬ友より暑中見舞

インデイアンのキヤンプファイヤー心澄む

遠雷や締切近きものばかり

砂漠にはアイドルもゐて青蜥蜴

微風やベリーのジュースうす紫

夏大根ローマ字の札光るなり

サングラス何処の誰かとバツクミラー

冷奴ソースは好みアメリカン

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

ひと巡りする菜園や夕すずし
札 幌 野村 鞆枝

渡り来る風にさざ波湖すずし

夕顔や淡く暮れゆく聖母坂

水底に魚影ちらり里涼し

木槿咲く川沿の道工事中

紫陽花は雨が似合ひか問ひかける

梅雨明けてひときは山の雲白し

打上がる火花に酔の深まれり

鉾立や長老若し京言葉

鉾回し静寂のあと大拍手

鉾囃子宿の裏庭なほ聞こゆ

祇園会や夢に会ふ父割烹着

衣を脱ぐ蛇あをあをと人柱

浮草や人に呼ばれて鯉鳴けり

魚の目玉食べて極暑をやり過ごす

ビール染める緑風選挙の声とほる

やつと二人たうたう二人心太

炎天に鍵かけ誰もあなくなる

思想などシヤツとざぶざぶ洗ふ夏

白木いつぼん立つてゐるだけの夏野

ふるさとの一番ホーム栗の花

風鈴に委ねてをりし猫の耳

独り身を背中で通しビール抜く

残暑かな鬼面の口の半開き

青空をひきよせてゐる百日紅

蜘蛛の囲をきれいに残し蜘蛛の留守

クレソンに朝があふれて晩夏なり

ひとときは詩人のこころ初夏

夏ばてや温泉卵喉滑べる

喜寿を越え種痘の痕の汗拭ふ

夕虹や木椅子に待ちし町のバス

母の忌や白玉だんごの臍揃ふ

一人旅の子の背眩しや法師蟬

僕の手は大き目もみぢ蟬を持つ

恐竜たちと対話してゐる夏帽子

うまい覚め故郷にゐたり法師蟬

茗荷の子摘む手は母の匂ひする

友逝けり五感にひびく青田風

金魚三匹釣れて家族の名で呼べり

草に追はれ草引く日課明日も晴

大利根の流れ曲げをり雷雨くる

蜘蛛の囲に銀のつぶつぶ木魚泣く

はまなすに夕日の落つる利那かな

薄き風窓より入れて夜の秋

佐々木紗知

布川 孝子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

高野 春子

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

酒田 藤波 松山